

檀家制度の定着

瑛訪 匠探

宝光寺のお堂

市内貝塚（豊栄地区）に「山里の寺」の雰囲気をただよわす宝光寺があります。

急な石段を登り山門をくぐると、背後の山につつまれるようにして正面に本堂、左側に阿弥陀堂（あみだどう）、大師堂が建ち並んでいます。

この寺で注目したいのは、1671年（寛文11年）に建てられ市文化財に指定されている



宝光寺の阿弥陀堂

る阿弥陀堂です。この堂は、貝塚村をはじめ近隣40数か村の寄付によって建てられました。

徳川幕府の政策によって1640年代に民衆は、必ず菩提寺（ぼだいじ・檀那寺ともいう）を持つこととされ、現在残るような檀家制度が成立しました。子が生まれると寺に届け、日常生活では檀那寺が発行する証文が必要とされました。

宝光寺阿弥陀堂は、檀家制度がしだいに定着するなかで多くの寄付者をつのることができました。これらの村のなかには、旧八日市場北部地域の村むらや旧野栄地区の野手、今泉、川辺、栢田村なども含まれました。このときお堂とともに「本尊の阿弥陀（あみだ）さまも造立されたでしょうから、中心となった貝塚村の布施四郎右衛門や同寺住職の活躍はめざましかったのでしよう。

1670年ごろからそれぞれの村むらでは寺院や神社の建立が盛んになります。調査

の済んだ旧八日市場市内に限ると、宝光寺阿弥陀堂のように近隣村むらから援助を得て建てられた例はほとんど見られません。

1669年（寛文9年）銚子・飯沼山田福寺の「釈迦涅槃図（しゃかねはんず）」の寄進者には遠くは関西、特に和歌山、大阪、江戸の町人らとともに九十九里沿岸村の有力者も多数見られます。市域では吉崎、長谷、木積、川辺、栢田などで村ぐるみで援助したのをはじめ、八日市場、大寺など数か村の農民の名もあります。宝光寺阿弥陀堂もこうした信仰圏の広がりや時代の動きも影響したのでしょうか。

およそ100年後に、このお堂を修理していますが、このときは寺院本末制度のもと宝光寺の門末5か寺のある新村など4か村と貝塚村とで費用を出し合いました。

寺院檀家制度が定着し、檀家のつとめとして先祖の年忌や盆、彼岸には墓参し、寺の修理や行事にはすすんで寄進することが求められました。260年も続いていることとなります。

関八日市場図書館 ☎73・3746